

藤田嗣治《辻美人》解題 - 沖縄美術史研究を通して

Fujita Tsuguharu's "Tsuiji Bijin": A Study of Okinawan Art History

豊見山 愛 TOMIYAMA Megumi

On April 27, 1938, Fujita Tsuguharu, Takeya Fujio, and Kajiya Rynji and his wife visited Okinawa on the Osaka Merchant Marine's Ukishima Maru, guided by Haebaru Choko, an artist from Okinawa. They introduced the artist to Okinawan dignitaries, hosted some welcome parties, and gave lectures. The oil painting "Tsuiji Bijin" (1938), which Fujita painted at that time, shows a brown-skinned woman dressed in Ryukyuan clothing, a far cry from the Grand Feueen Blanc (milky-white undercoat) that he had been acclaimed for in Paris.

In this article, we will take a closer look at the appeal of "Tsuiji Bijin" through the eyes of the painter Fujita Tsuguharu. Moreover, by surveying the local newspapers, including the Ryukyu Shimpo, we will learn about what attracted the artist to Okinawa in 1938. Further, I would like to clarify the relationship between the history of Okinawan art and Fujita, who lived his entire life as a painter from a different background, and his influence on the Okinawan people.

はじめに

なめらかな白い地塗りの上に、繊細な墨線で描く世界的な画家・藤田嗣治が、1938年に、沖縄出身の画家・南風原朝光¹の案内で、沖縄を訪れた。沖縄を、人を、そして琉球舞踊を愛してやまない南風原は、1932年に大城皓也²と協力し、沖縄美術協会を作り、第一回展を神田三省堂画廊で開催するなど、精力的に制作をしていた。南風原は、1933年に帰郷した翌年、妻子を沖縄に残し一人上京、アトリエ付きの借間があった池袋に住む。池袋では「おもろ」や「珊瑚」、「梯梧」などの泡盛屋に毎夜のごとく通い、そこでは気のおけない友人であった詩人の山之口漠と、玄人はだしの琉舞をよく披露していた。

私は今度突然那覇へ参りましたが動機はあすこに並んでいる南風原、竹谷、加治屋三君が琉球へ行くといっているので、迷惑でなかったら私も連れて行ってくれと速達でお願いしてお伴してきた様な訳で、私としては内緒に沖縄の研究をしたいと思っていましたがそれが図らずも大阪商船や新聞社の方々に騒がれ迷惑に思っている次第であります³

さて、沖縄の新聞社・琉球新報は、藤田一行への取材だけではなく、歓迎の宴や講演会、展覧会の後援をとるなど、彼らの旅を全面的に支援していた。1893年に創刊し、沖縄最初の新聞である同社は、男爵である尚順(しょう・じゅん)が社長、太田朝敷(おおた・ちようふ)が編集担当を務めていたが、1938年当時は太田が社長に就任している。太田は、1882年に第

1 南風原朝光(はえばる・ちようこう 1904-1961年) 琉球丸船員の父と母との次男として当時の真和志村宇安里に生まれた。

1918年、沖縄県立第二中学校に入学するも1919年に同校を中退し、台湾で医業を営む兄の元に引き取られる。生涯にわたり、兄の朝保は年の離れた弟の朝光を支え続けた。翌1920年に上京し、朝保の知人であった彫刻家の横江喜純宅に寄寓して以降、南風原は東京を本拠とし画業を行っていくこととなる。

2 大城 皓也(おおしろ こうや、1911 - 1980年)は、沖縄県出身の洋画家である。1918年に沖縄県立第二中学校(現・沖縄県立那覇高等学校)に入学し、在学時に美術教師・比嘉景常の指導を受ける。東京美術学校に現役で洋画科へ入学、卒業後は帰郷し、開南中学校で美術教師となり、戦後はニシムイ美術村でアトリエ兼住居を構え、制作を続けた。

3 「世界を語る(-) / 藤田画伯講演概要」 琉球新報1938年5月19日木曜日3面

1 回県費留学生として高嶺朝教、謝花昇らと上京し、学習院を経て、慶應義塾で福沢諭吉の薫陶を受けた人物であるが、沖縄が日本へ同化することを後押しした。当時の沖縄は経済が困窮しており、謝花昇が自由民権運動を率いていたが、琉球新報は第4代沖縄知事の奈良原繁と共に、謝花を弾圧して、この政治運動を鎮静している。なお、当時の主筆は又吉康和⁴であり、戦後のニシムイ美術村創設を支えた一人であった。

沖縄の文化や芸能が、経済的な貧困で、あるいは日本から押し寄せる近代化の波にさらわれて、その姿を失いかけた1938年の沖縄で、藤田は何を見、何を感じたのだろうか。

よって本文では、当館コレクションの油彩画《辻美人》(1938年)についての解題を目的として、藤田嗣治の眼を通した1938年当時の沖縄について思いを巡らせ、画家が惹きつけられた《辻美人》の背景と魅力に迫り、異境の画家として生涯を終えた藤田が沖縄の人へ与えた影響を明らかにする。

このことは、日本の近代美術史に寄与するだけでなく、第二次世界大戦で文化財の数々を灰塵に帰した沖縄美術研究にとって、有益となろう。藤田は、類まれなる強運に導かれて、沖縄の要人たちに精通する南風原朝光の案内によって、琉球王国時代の名残を感じることができた。また、その様子を私たちは運よく、琉球新報などの記事によってつぶさに知ることができるのである。

1. 1938年以前の藤田嗣治について

藤田嗣治は1886年、東京牛込で父親が元家老の家柄、当時の陸軍軍医という名家の次男として生まれた。その後、東京美術学校へと進学する。さつそくではあるが、沖縄滞在時の次の講演内容を参照されたい。画家を志し、意を決して父に手紙を書いたことや、兄と仲が悪いこと、また、トレード・マークとなったロイド眼鏡は、極度の近視眼によるものであることが窺える。

一体私は何う云う人間かと云いますと江戸川の大曲りに生まれたせい
かつむぢ曲りで小さい時分から絵が好きだったが家の者に叱られて終
いには木に登って絵をかいていました、(中略)

中学三年のとき親父に絵を勉強したいと手紙を書いた所、それ程お前
が決心しているならと金を一袋送ってくれたので、それで絵の具を買っ
て勉強しました、私は極度の近視眼なので兄は絵を勉強しても駄目だ
と叱言を云っていましたが、私は盲啞學校に入って按摩になりそれから
絵の勉強をするから兄貴の世話にはならないと云ってやりました、
美術学校を出ると今の帝展になっている当時の文展に三回出品して三
回とも落選しました、それでは本場のパリーへ行つて勉強しようと決

4 又吉康和(またよし・こうわ、1887-1953年)1908年、沖縄県立第一中学校を卒業し、愛知医学専門学校に学んだが、中退して早稲田大学に学ぶ。早稲田在学中によく東京劇僧を仲吉良光の居る琉球新報に送っていた。1915年に帰沖後、当真嗣合、仲吉良光、末吉麦門冬、嘉手川重利、小橋川朝明が「閥族打破」を理由に琉球新報を退社後、その後任記者として琉球新報に入社した。1929年から琉球新報主筆となり、39年からは社長となる。1941年一県一紙への統合により「沖縄新報」の常任監査役となる。戦後は沖縄諮詢会委員の総務部長となつて、ニシムイ創設を後押しした。

心し大正二年に当時は飛行機もなく四千トンの小さい汽船で日本を立ちました、ヨーロッパと云えば実にハイカラな国だろうと私は髪にコテを当てたりしておめかしをしましたが、行ってみるとパリは昔からの伝統を護る古い市でランプをつけるとか、下水も不完全であるとか、エレベーターもなく、マッチを擦りながら階段を登って行くと云った風なもので、そのために世界各地から毎年何十万人という観光客が遊覧にきて莫大の金を落としていきます⁵

5 3 と同間

東京美術学校を卒業した藤田は1913年、初めてパリを訪れ、独自の絵画スタイルを追求していく。ほどなくして、パリのモンパルナスという貧しい画家の卵たちが多く住む地域に住み始め、モディリアーニやシャガールら若い芸術家と親しくなり、交流を深めた。パブロ・ピカソのアトリエを訪問し、ピカソの作品などを見、あるいはパリのさまざまな前衛芸術の動向に刺激を受けた藤田は、独自の表現を模索していった。当時のフランスで立体派（キュビズム）とよばれる芸術運動をはじめ、先端芸術に触れた藤田は、むしろ日本美術を再評価する。16年ぶりとなる1929年に帰国し、展覧会を開いたが日本での評価は芳しくなく、気落ちした藤田は、再びフランスへと旅立つ。1931年には南米に向かい個展を開き、そこでも大成功をおさめた。

世界で最も有名な日本人画家となった藤田は、丸メガネやおかつば頭、派手なファッションと彼独特の愛嬌で知られた。中南米を巡遊した後、藤田は1933年11月、47歳で南アメリカから日本に帰国すると、49歳で、25歳年下の君代（1911 - 2009年）と出会い、1936年に5度目の結婚をする。初めての沖縄旅行へ出かけたのは、その2年後となる1938年4月から5月にかけてであった。沖縄にあこがれを抱いていた当時51歳の藤田は、3週間もの長期にわたり、沖縄に滞在した。

2. 1938年の沖縄ブーム

この年は、藤田と同じ二科会の中堅画家、有限善郎と坂宗一の両氏も、南島沖縄の風物に憧れ1月31日入港の嘉義丸で来県したと、以下を含めて報じている。有限氏は福岡市の出身で昭和10年に渡仏しサロンに出品、風景画家として知られ、坂氏は14、5年前より二科に出品、前年二科賞を獲得した画家である。記事によると、沖縄家政高等女学校の本間という教師の案内で、沖縄到着日に首里城を見学している。

約四十日間滞在し主として国頭地方の海岸を描きたいと思っています、きょう首里城を見ましたが、琉球古代文化の偉大さに胸を打たれました、これからゆっくり落ち付いて郷土博物館など見学しようと思いま

す、こちらでは別に展覧会を開催せず東京の新宿あたりで開こうかと考えています⁶

また、兵庫県出身の洋画家・伊藤清永も、神戸出帆の浮島丸で同年3月7日に、沖縄入りしていた。琉球新報の記事でも「文展の特選作家 / 伊藤清永氏 / 画題を求めて九日来県」と報じている (fig.1)。当時、東京美術学校在学中の安次嶺金正⁷が案内をして、文展へ出品する画題を求めて、沖縄を取材している。

兼ねがねから常夏の御当地にはほんとに憧れていました、もっと早くにと思っていましたが母校愛知中学の講堂に掲げる四十坪もある大きな壁画を執筆していたため遅れました、岡田先生も是非沖縄へ行こうと仰言っていましたが目が悪く遂々お出でがなかったがその代り私に二人分仰せ付かって恐縮していますよ…主として風俗を題材に一ヶ月位滞留して小品を執筆したいと思うが帰京後整理したト場合によっては文展に出品したいと思う白日章の獲得者南風原朝光氏も来月中頃加治屋隆 (治) 氏を案内して来県する筈である⁸

文中の「岡田先生」とは、伊藤が師事していた、岡田三郎助 (おかだ さぶろうすけ、1869 - 1939 年のことであろう。岡田は、東京美術学校教授で洋画界の重鎮であった。伊藤清永は、この滞在中か、あるいはその際のスケッチを基に、油彩画《紺地小》(クンジグワー。1938 年 (fig.2)) を描いた。琉装姿の女性像を画題としているが、その髪型は辻 (チージ) という地域特有の、左右のハイの形が傾く流麗な結い方に見え、辻の女性がモデルで間違いないだろう。辻については後述するが、藤田嗣治もまた、辻の女性を描いている。

さて、伊藤清永は記事によると、4月16日土曜日から翌17日日曜日まで、那覇市大門前の南陽薬品階上において作品展を開催した。その内容は、赤色調の端麗な作品で糸満、首里那覇近郊を主とし、本部、四ツ竹踊の人物等二十八点作品を展示している。なお、伊藤は4月中滞在をするつもりであったが、4月18日に帰郷の途に就いた。日本画壇の異端児・藤田嗣治との再会は叶わず、「短期日の間にこれで沖縄を描いたとは□□れません琉球にはもっと素張しいものが沢山あります海の色は始めて見る美しさですフランスへ行けない画家は沖縄に洋行すべきです」⁹と伊藤は、後ろ髪を引かれつつ、数々の画家を魅了する沖縄を離れた。

6 「琉球古代文化の / 偉大さを賞讃 / 二科の中堅有限、坂両氏来県」 琉球新報 1938 年 2 月 1 日火曜日 3 面

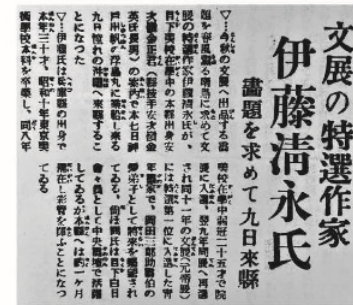


fig.1

7 安次嶺金正 (あしみね・かねまさ、1916-1993 年) 沖縄県国頭出身。1941 年に文展《浜木綿》入選、同年、東京美術学校油画科を卒業。終戦後に帰郷、1950 年に安谷屋止義らと戦後初のグループ展「五人展」を結成する。

8 「琉球風俗を取材 / 文展の伊藤画伯語る」 琉球新報 1938 年 2 月 1 日火曜日 3 面



fig.2

9 「伊藤氏展 / 好評 / 会期は本日で」 琉球新報 1938 年 4 月 17 日日曜日 3 面

3. 藤田嗣治一行の来沖

さて、沖縄入りを果たした、1938年4月27日からの藤田嗣治一行の動向については、当時の琉球新報社長であった太田朝敷¹⁰が当時在京の山之口猷や画家の南風原朝光を通じて知っていた。

到着前の一報は次の通りである。

日本が生んだ世界的な画家としてその浮世絵的な繊細な画風により仏蘭西美術界でも特異な彩管を謳われた藤田嗣治画伯が南島の異種的な風物に憧れ明27日入港の浮島丸で来県するという素晴らしいニュースがある

藤田画伯は明治18年東京に生まれ東京美術学校卒業、1914年仏蘭西に渡り・サロンドウトヌ、サロンチュイルリー等に出品し世界的にその作風を謳われた、サロンドウトヌ会員、帝展無鑑査級の作家で現在は二科に属している

日本に帰ったのは数年前であのおかっぱの頭髪とロイド眼鏡で一般にも親しまれている。尚世界一流の画家ピカソ、モダリアロ、マチス、バンドンゲン等と親交し先頃は日本紹介の映画等をとって、国際的に活躍している

そのほか同船では二科の常連画家である加治屋隆治夫妻、竹谷富士雄等が南風原朝光氏の案内で来県することになっている。¹¹

いったい、どれほどの沖縄県民が、画家・藤田嗣治を知っていたのかは定かではないが、藤田一行はインタビューだけではなく、雑誌の対談や講演会、沖縄の美術団体との交流会や歓迎会などのハードワークをこなすこととなった。初め藤田は、この沖縄旅行の経緯について、次のように語っている。

ずっと以前から行って見たいとは思っていたが一人では淋しいし、幸い若い人たちが行くので楽しみにしていた。ブラジルやメキシコにも行って沖縄県人の多い事もよく知っている、アルゼンチンに行った時、5、60名の沖縄県人の歓迎を受けて1日楽しく過ごしたこともあった、またブラジルでは農口をやっている人々に招かれて空手などを見せて貰ったこともある。私は世界中を廻っているから沖縄の気候も大抵想像がついていた、とりわけ空や海の貝殻等の美しさ、風俗等、期待していたがきょう着いてこちらの風物に接した□、私の期待を裏切らなかった、風俗にしてもあの髪形の形など沖縄の景色と実によく調和がとれ、また女の人が胸や脚を丸出しにして肉体の線をかくさない所な

10 太田朝敷（おおた・ちようふ、1865 - 1938年）は、旧・琉球新報の設立に参加し、のちに社長となる。琉球新報1938年3月14日月曜日3面によると、伊江朝輔男爵の発起で彫刻家の山田真山が古稀を祈念する寿像が作られたという。

11 「春の南島へ珍客 / 世界的な / 藤田嗣治画伯 / その他二科の画家連 / あす浮島丸で来県」琉球新報1938年4月26日火曜日。

ど立派な立派な画材である

我々洋画家には南国の強い光線が良い、ゴッホ、セザンヌ、ゴーガンなどすべて南国の強い光線と色彩のきれいな風物を描いている、今度の旅は約3週間滞在し画学生のつもりで一生懸命描く積りである

まあ私が良い絵を描けばそれだけ沖縄の紹介になるだろうし県の人たちも喜んでくれるだろう

尚を竹谷、加治屋両氏も3週間滞在し秋の二科展出品の作品を描くことになっている。¹²

12 「東京から赤切符の旅 / 世界の“藤田”、画伯来県 / 銀髪のお河童にロイド眼鏡 / 南風原氏や二科の新人も同伴」(琉球新報 1938 年 4 月 29 日 木曜日)

藤田に話を戻すと、このような沖縄ブームの最中に藤田は来沖したのであるが、その歓待ぶりはそれまでの比にあらず、琉球新報の記事で同定できただけでも、大変なハード・スケジュールであったことがわかる。

それでも藤田、竹谷、加治屋隆治氏の一行は連日朝早くから大きなキャンバスに向かい、制作に胸を躍らせていた。

●藤田嗣治の沖縄滞在スケジュール

4月27日 — 大阪商船・浮島丸にて来沖、滞在は波之上宮司宅の空部屋に滞在、食事は南風原朝光の妻が作った

4月28日 — 雨模様の中、竹谷・加治屋両氏と市内見学に出かける。案内人もなくショーウィンドウを眺めたり、藤田は紺地の着物を求めてシャツの上から着用したりした。昼食後、西武門で看板のスケッチ後、午後2時半頃首里へ行き、伊豆見首里市長の好意で平良書記が案内し首里城址や博物館等を見学した。藤田は目を輝かせながら「城郭の構成は素晴らしい。建築も南国的な落ち着きがあって感じがいい」と称賛したという¹³

13 「南島の第一夜 / 紺緋の感触を楽しむ / 藤田さん上機嫌 / 対策にハリ切る一行」琉球新報 1938 年 4 月 29 日 金曜日 3 面

4月28日 — 琉球新報主催の「藤田画伯に物を訊く座談会」が実施される。¹⁴ 出席者は藤田、竹谷、加治屋、南風原の他、沖縄側は総務部長・森下重格、首里市長・伊豆見元永、沖縄県立第二中学校美術教諭で樹緑会を率いた比嘉景常、沖縄県立第二高等女学校の教諭、渡口政興と琉球新報本社の太田朝敷社長ならびに又吉康和主筆が参加した。この内容は、同年5月1日から4日まで、琉球新報紙面にて連載された

14 「藤田画伯に / 物を訊く座談会 / きのう本社主催で開催」琉球新報 1938 年 4 月 29 日 金曜日 3 面

5月6日 — 珊瑚座の招きで、琉球芸能を堪能する。小屋も割れんばかりの大入りで、二階中央の招待席には藤田嗣治、竹谷富士雄、加治屋隆治氏夫妻をかこんで一行の案内役南風原朝光、渡口二高女教諭、比嘉二中教諭、國吉琉球新報学芸部主任各夫妻と名渡山愛順二高女教諭、大

嶺那尋高訓導らが接待に努めた。演目は眞境名由康の組踊「女物狂」（人盗人）、舞踊「浜千鳥節」「金細工」「天川」「鳩間節」を鑑賞し、最後に組踊「義臣物語」では、眞境名と島袋光裕が好演技をみせ、観衆の嵐の様な拍手に交って藤田も微笑しながら拍手を送り、吸いつけられた様にスケッチブックに鉛筆を走らせていた。

「（藤田）優雅でとても楽しく拝見しました衣裳の美しいのに眼を引かれました」¹⁵

5月9日 ― 沖縄県立第二高等女学校にて藤田、竹谷の講演会が催される。以下は藤田の講話内容の抜粋である。

「突然那覇へやってきましたが、目的は沖縄の風物を写生するため毎日、日中は面会をお断りして勉強しています、先日、渡口¹⁶、名渡山¹⁷両先生が見えて学校で話をしてくれとの事でしたが一回はいやだいやだとお断りしたものの、たつてのご依頼に、ではカップの顔でも見て貰いに上がりましょうとやってきたわけです（中略）私は二十七年間外国に生活して主にフランスのパリーにいました」¹⁸

「元来日本は美術の盛んな国で恰もフランスとドイツを一緒にした様な国柄である、ドイツの様に機械文明に囚われるのもいけないし、そうかと云ってフランスの様に美術に専ら傾くのも考えもので、若し日本が美術と工芸両方面の発達を考えたら世界で一番強い将来ある国となるでしょう（中略）この学校からも東京の展覧会に入選なさった方がある様ですが元来日本の女の人はお嫁にゆくと直ぐ絵をやめる、私は日本の女性もフランスの婦人の様にいつまでも趣味的に絵を楽しむ習慣を持って貰いたいと思います」¹⁹

「私は今度沖縄へきて日本の広い事に驚いています、太陽が輝き、珍しい動植物が棲んでいて実に有難い処だと喜んでいますが、日本は狭い国で今後どしどし南洋方面に発展しなければならぬが、その意味でも沖縄は大事な土地です、みなさんは将来母となり主婦ともなられる方たちですから東京や大阪の都会の人達を羨むことなく、沖縄の自然を愛し、自分の土地に満足して立派な婦人になられる様に勉強なささい。私達は暫らく滞在して首里や那覇の美しい風物を絵にし、東京に帰ったら沖縄の宣伝をやりたいと思っています。（下線は筆者）²⁰

5月10日 ― 午後7時より那覇市内見晴亭にて、美術団体主催の藤田画伯一行歓迎会²¹

15 「アイスクーキをしゃぶる 藤田画伯の横顔 / 那覇の劇場で楽しい一夜 / 情味溢るスナップ」琉球新報 1938 年 5 月 7 日土曜日 3 面

16 渡口政興（とぐち・せいこう、生没年不明）戦前、沖縄県第二高等女学校にて名渡山愛順の同僚教師であり、音楽を教えた。

17 名渡山愛順（などやま・あいじゅん、1918 - 1970 年）、沖縄県那覇市松下（現：松山町）生まれ。沖縄県第二中学校卒業後、1927 年に東京美術学校（現：東京藝術大学）へ入学、和田英作、金山平三に師事。1928 年、第 9 回帝展初入選以後文展、日展に十数回入選をするなど、早くから団体展への意欲的な出品をみせ、1932 年東京美術学校卒業に帰郷、沖縄県第二高等女学校で教職に就く。1941 年に紀元 2600 年奉祝展、大東亜戦争美術展入選。1945 年、画材購入のため本土に渡るが戦争激化で帰郷できず、大分県竹田に疎開。1946 年、帰沖。光風会会員に推挙を受け、米民政府沖縄諮問委員会、文化庁芸術課の美術技官に就く。

18 「為めにならぬ面白い話 / 二高女で藤田画伯講演（上）」琉球新報 5 月 10 日火曜日 3 面

19 「お嫁に行っても絵を止めぬ事 / 二高女で藤田画伯講演（中）」琉球新報 1938 年 5 月 11 水曜日 3 面

20 「地球を二度廻った結論 / 二高女で / 藤田画伯講演（下）」琉球新報 1938 年 5 月 12 日木曜日 3 面

21 「美術団体が来る十日歓迎会」（1938 年 5 月 日、琉球新報）「美術団体主催の藤田画伯一行歓迎会は来る十日午後七時から見晴亭で開催される事になったが当日は琉球口口最大の俳優玉城盛重翁の舞踊を上演し一行をねぎらう事になっている会費は一元五十銭（当日持参）の舞踊を見る（那覇の見晴亭、午後七時より）」

5月12日 ― 午後7時より波之上天尊廟にて二中樹緑会座談会と作品批評会、終了後は懇親会²²

5月14・15日 ― 藤田嗣治、竹谷富士雄、加治屋隆二夫妻、南風原朝光の総合絵画展覧会が那覇市大門前の南陽薬品 (fig.4) にて開催される。出品点数は沖縄を題材とする風景人物 30 数点で、藤田は油絵 2 点と色紙 5 点を展示した

▲藤田嗣治《家》(6号)、《顔》(4号)

▲竹谷富士雄《口は眠る》(12号)、《名橋》(8号)、《裸女》(5号)、《梯梧咲く頃》(3号)、庭隅 (4号)、《先生の家》(4号)、《歴史ある橋》(4号)

▲加治屋隆二《風景》(8号)、《ガジマル》(8号)、《風景》(8号)、《家》(6号)、《顔》(6号)、《山北風景》(3号)、《南国の花》(サムホール)

▲南風原朝光《小田原の海》(6号)、《富士A》(4号)、《富士B》(3号)、《池袋の夜》(3号)、《廃きょ》(サムホール)、《東京郊外》(サムホール)、《静物》(4号)、《風景》²³

5月15日 ― 午後8時半から昭和会館で琉球新報本社主催の藤田嗣治講演会「世界を語る」開催。約8百人の聴衆を魅了した。森下県総務部長ほか地名士も参加し、同社・又古康和主筆の紹介ののち約1時間半にわたり話をした。世話になった感謝を述べ、古い文化の保存について強調した²⁴

5月16・17日 ― 藤田嗣治作品鑑賞会(琉球新報社後援、大門前南陽薬品階上)「去る27日来県した藤田嗣治画伯は滞在十数日に渡り本県の異色なる風物を得意の彩管で揮い、多大の収穫を土産にいよいよ来る18日帰京することになったが、同画伯の画風を慕う有志の間では同氏の来県を記念し作品鑑賞の催しを希望した所、画伯、多忙の時間をさいて心よく承諾し明16、17日両日間大門前南陽薬品楼上で鑑賞会を催すことになった、

出品作品は日本画18点、洋画6点で日本画は1尺八寸五分巾の大作午後7時まで―目録は左の如し

△日本画「荒鷺」、「那覇の花」、「空襲」、「海老」、「白百合」、「沖縄の魚類」、「波上の飛魚」(2点)、「春の野辺」、「那覇の女」、「路と蛙」、「海の幸」、「桜に鶯と猫」、「猫」、「菖蒲」、「巴里の女」、「内海の幸」、「朝顔」

△油絵「道」(那覇風景)12号、「海を見寄る墓」(同)12号、「辻美人」(同)4号、「某婦人」(同)4号、出征兵士の家(同)3号、子守歌(同)4号」

5月19日 ― 竹谷富士雄と大阪商船の湖北丸にて二人で帰途に就く

22「二中樹緑会座談会開催」琉球新報 1938年5月12日木曜日3面「二中樹緑会では藤田画伯を迎えて本12日午後7時より波之上天尊廟に於いて座談会及び作品批評会を開催、終了後懇親会を催すことになっている。当日は二中樹緑会役員の出席を希望すると」(fig.3)



fig.3

23「藤田画伯一行 / 総合展覧会 / 十四、十五両日に開催」琉球新報 1938年5月12日木曜日3面 (fig.3)

24「藤田画伯講演会 / 盛況を極む / 古琉球文化の保存を強調」琉球新報 1938年5月16日月曜日3面



fig.4 那覇(商店)／南陽薬品株式会社西武門出張所(那覇市歴史博物館提供)



fig.5 旧那覇地図 昭和10年頃(部分)(那覇市歴史博物館提供) 右から4軒目が大門前の南陽薬品か。川添いに琉球新報社が見える。

4. 琉装をめぐる沖縄の課題と画題

伊藤清永が描いた《紺地小》と同じく、1938年に藤田嗣治が描いた油彩画の《辻美人》もまた、琉装の女性である。

しかし当時の沖縄では、日本への同化あるいは近代化の促進を目的に、琉装の撤廃を求める声が高まっていた。

琉球新報の1938年5月10日では「婦人の琉装改善 / 初等教育研究会 二日目 / 賑やかに意見開陳」とし、以下のような議論が紹介されている。

- ▲島袋源一郎氏 早く実現方に努力し実行運動に勤めたい
- ▲當山真和志校長 各校の学区に於て和装の意味を徹底して促進したらどうか
- ▲新里男師教諭 他府県の実情を都会と地方別に調査して実施したらどうか
- ▲川平校長 束髪は直に実行できるが美という点を考慮に入れなければならない、服装は経済、能率、美の三点から考えて労働即美、生活則美でなければならない

さらに、當山真和志校長は、次のような発言を続ける。「訓育の徹底は教師其人の-high 識見、清き人格を児童に反映せしめ日本国民としての確乎不動の信念を與うると共に其の信念に基く高潔なる生活習慣を訓致することが大切な事項である」と述べ、事変後の日本国民として県民が発展するために、その重責の自覚を教師らに促すべきだとしている。

しかし、1938年5月2日の琉球新報「豚料理と紺絛を礼賛 / 琉装廃止には反対 / 素晴らしい波上宮の風致 藤田画伯に物を訊く座談会 (2)」では、又古康和、比嘉景常、山里永吉²⁵と、藤田の次のような会話が収録されている。

(藤田) 私は旅行をすると、その土地の風俗や料理にすぐ親しむよう努力しています。夕べも沖縄の紺絛を買ってきて早速つけてみましたが、良いですね。支那へ行った時も向こうの着物を着たものです。(略)

(比嘉) 着物の話が出ましたが…現在本県では琉装が問題になっていますが、それに就てどうお考えですか？

(藤田) リュウソウと云うと？

(比嘉) 琉球の服装を廃止しようという問題なんです。(藤田) 僕はそのれには反対する。あの服装は決して非文明的ではない。若しそれを廃止するというならその土地の県民性もなくなると思いま

25 山里永吉（やまぎと・えいきち、1902-1969年）那覇に生まれる。1923年に日本美術学校2年時編入するも、その後中退。同期の田河水泡の紹介で村山知義と知り合い「マヴォ」同人となる。《立っている男》が「マヴォ」の表紙に掲載。「首里城明渡」など戯曲執筆で知られている。

すネ。それに世界が皆んな同じようになつたら面白くもないし。
わざわざ遠い所へ行つて見る必要もないじゃありませんか。

(又吉) インテリゲンチヤが反対しているんです。

(藤田) 例えばあの丸ノ内あたりの建築でも、アメリカ式の安っぽい建物がゴチャゴチャしていて少しも特徴がなくよくないです。

(又吉) 少しひがみかも知れませんが、琉装を廃止することは善かれ悪かれ全日本に同化しようという所から出発しているんじゃないかと思います。

(比嘉) そうですね、本県の人には思想上の点では他県と少しも異なつた事はありませんが、只、他県へ琉装してゆくと、琉球人だと特別扱いにされるもんだから、その為でしょう。

(藤田) 然し、例えばあの瀧のような髪を持った沖縄の女がパーマメントでもかけたら、便利は便利でしょうが、おかしい (笑声)。

また藤田は、東京でもしばしば紅型を見る機会があつたというが、尚順男爵邸応接間での対談で、紅型を興味深く眺め次のように語つた。

(藤田) この紅型は実際見事なものです。実に素晴らしいものだ。

(山里) 3番目の紺地の紅型はちょっと変つて面白いですね。

(藤田) 素敵なものだ、先月博物館で見たのなんか問題じゃないねえ。²⁶

²⁶ 「尚順男爵と藤田嗣治画伯の対談会」、『月刊沖縄』6月号、山里永吉編集、1938年6月1日発行、25頁。

藤田が沖縄を訪れたのは、日本併合後の沖縄社会であり、琉球王国時代の文化、慣習、風俗等を野蛮なものと考え、日本への同化を促進する風潮があつた。しかし皮肉なことに、沖縄を訪れた画家たちは一様に、琉球文化を肯定的にとらえている。その一つが琉装である。

5. 1938年に藤田嗣治が描いた琉装の女性

第25回二科展は昭和13年9月3日から10月4日まで東京府美術館で昭和13年10月30日から11月13日まで、大阪市美術館にて開催され藤田は《孫(那覇)》、《竈の前(那覇)》、《客人(糸満)》また事変関係展示作品として《島の訣別(那覇)》の4点を出品した。次の批評は数あるなかで、標準的だと思われる。

藤田嗣治氏の琉球風俗は、人形とか染物とか朱膳とかいうような郷土的な小道具の使い方が実にうまい、構図の立体的な組み立ても要領を得ている。人物は外人の見た日本人の類型という感じであるが、それだけ一般日本人の気のつかない急所をつかんでいるところもあ

る。この手法で日本の各地の郷土的風俗を魅力的に写してもらいたいものである²⁷

なお、藤田の来沖に刺激を受けた大城皓也もまた、同展に《遊女と馬》(fig.6)と《南の島の女達》を出品し、世界の流行を意識した藤田に負けずとも劣らない、前衛的な表現を見せている。しかし、藤田の思いである「まあ私が良い絵を描けばそれだけ沖縄の紹介になるだろうし県の人たちも喜んでくれるだろう」という目論見は、「外人の見た日本人の類型」と評されているところから、日本画壇には通じなかったのだろう。

しかし筆者は、藤田嗣治の類まれなる前衛的画家としての才能、特にキュビズムの表現に長け、民俗学的な興味を持って、その固有の文化を描く画家としての力量は未だ正当に評価されていないと考える。当時の日本国家が近代化を推し進めているなかで、沖縄をはじめとする外地に求めるものはエキゾチズムであって、ローカルの側の視点を取り入れる絵画など、時代の要求になかったということだろうか。藤田嗣治は、日本の近代国家では受け入れがたい、孤独な画家だったといわざるをえない。

6. 油彩画《辻美人》解題

当館のコレクションである油彩画の《辻美人》は、1938年5月16、17日に大門前南陽薬品で開催された、藤田嗣治作品鑑賞会への出品作である。沖縄県外のギャラリーを通じて、購入した作品である。

筆者が画面右上にある文字を解説したところ、「那覇 アミやぐワ ふみちゃん 嗣治 Foujita 1938」と書かれている。那覇は地名、ふみちゃんは女性の名前で、おそらく絵のモデルであろうことは、安易に想像できた。しかし、「アミやぐわ」の意味については、解明するまで時間を要した。

筆者は「アミやぐわ」について、辻という場所に縁があるものと考えて、まず、那覇市史資料篇第2巻中の7に「旧辻遊郭之図」(p132-133・fig.7)に、それらしき屋号「雨屋小(アミヤグワ)」が記述されていることを確認した。

同書の辻遊郭について執筆を担当する外間米子氏によると、この地図は、終戦直前に那覇警察所が遊郭取り締まりのために作成されたものである。1934年に出版された、1926年から1931、あるいは32年ごろまでの新楼名と旧屋号が掲載されているが、外間氏は「時に沖縄警察に赴任した不粋な「ヤマトンチュ(大和人)のおエラ方のツルの一声で日本化しようとした」と、新楼名の由来を説いている。1919年に辻の大火で大半が焼失し、大和風(ヤマトフウ、日本風の意)の建物へと「近代化」されるとともに、名前も変化した。

さて、旧屋号「雨屋小」は《辻美人》の「アミやぐワ」で間違いのないのかと資料を探していたところ、大城皓也のエッセイ「藤田嗣治と沖縄」

27 森口多里「二科会絵画評」(みづゑ No.404 OCTOBRE、1938年、330頁)



fig.6 大城皓也《遊女と馬》1938年



fig.7 部分



fig.8 上図部分

(1967年10月9日月曜日、沖縄タイムス)に記されており、ほぼ間違いないとわかった。

辻に出かけては辻の女をデッサンしていたが、当時、福井楼という屋号の店に色白の遊女で“アミヤグワのマカテー”と呼んでいた女性がいた。その女性の美しさが藤田の目にとまり、さっそくデッサンしたが、その女性のデッサンが藤田画伯独特のあのおデコのとんがったフォルムとたくましい赤銅色の女性になってしまった。それは“アミヤグワのマカテー”を描くのではなく、その人を借りて琉球女性を描きたかったのであろうが、当時の“アミヤグワのマカテー”のファンだった人たちが「せっかくの美女を台無しにして…」と憤慨したという話は有名である。

「アミヤグワ」は「雨屋小（アミヤグワ）」であり、地図で確かに「福井楼」という楼名と一致された。元々、色白美人で有名だったマカテーグワは、なぜ「ふみちゃん」なのだろうか。当時の沖縄では、方言も厳しく取り締まられている。ヤマト風の呼び名だったのだろうか。

辻（チージ）とは、1672年から1944年の、いわゆる十・十空襲で全焼するまで270年余りも存続した公娼地帯のことを示す。しかし、社交場の中心地で政財界の要人や官公署、教育界の指導者をはじめ、商工業、県漁業にいたる、あらゆる階層の男たちの出入りする場所であったという。チージの女性たちは、町や村の貧しい家から仲買人を通して売られてきた、4～5歳から10歳前後の少女たちであった。たとえ、首里や那覇などの都市部出身であっても、家が借金や貧乏、親の病気などが理由でズリウイ（女郎売り）され、逃げれば連れ戻される。一人前になるまで、抱え親（貸座敷の女将）の下で踊りや三味線のけいこをし、カマヌクシ（電の後）の部屋で暮らしていた。ちなみに、沖縄を描いたとされる藤田の作品《電の前（那覇）》は、抱え親（アンマー）とその抱え妓とその子であろう。これについては、また別の機会に論じたい。

山里永吉編集の『月刊沖縄』7, 8月号で「時局と辻遊郭を語る有名婦人座談会」が銘打たれると、パネリストの一人、新垣美登子²⁸いわく「先月来朝された藤田画伯の様に世界を股に歩かれた方は、世界に珍らしい歓楽境だと申されて居りました。つまり男は容貌の美醜、粉飾の巧拙のみが問題ではないのよ、男性の本能を掴んだサービスだわ。家庭の女の眼を掩う様な露骨なコケティッシュが男の興味を引くのです。」と、嫌悪感をあらわにした。藤田の古き琉球の姿として、辻の女性を描くという美意識には、承服できなかったようである。

同書には、婦人座談会に引き続き、藤田作品へのコメントとして次のよ

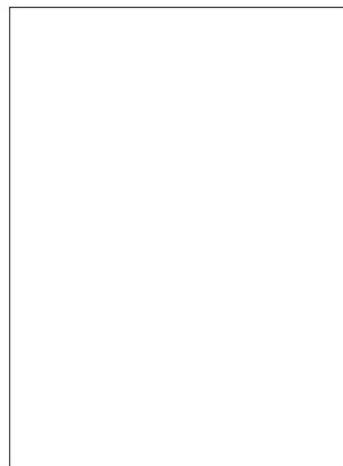


fig.9 《辻美人》1938年
(著作権により画像は印刷物のみ掲載)



fig.10 《辻美人》書付部分
(著作権により画像は印刷物のみ掲載)

28 新垣美登子（あらかき・みとこ、1901－96年）那覇市上之蔵町生まれの美容師、作家。新聞連載小説『花園地獄』（1935年）をはじめ『哀愁の旅』などの作品がある。沖縄の美容師第1号である。



fig.11 那覇（辻）／琉球美人（那覇市歴史博物館提供）

うに書かれている。

藤田嗣治氏を歓待して返した迄はよいが、氏が東京で発表する琉球観はあまりに（歪められた沖縄）であるのには困りものだ。「沖縄ではお額が出ッ張って観骨が張っている程美人と言っている」というに至っては、まるで沖縄人を南洋土人視している。沖縄人の審美眼は決して他府県といささかの相違もない筈なのに。

これは、画家でもある編集者の山里永吉が書いたと想像されるが、しかし、「沖縄人を南洋土人視している」という批判は、日本人としての同化を焦るがゆえに、沖縄県内での差別感を広げてしまっていた構造をも示唆している。

おわりに

琉球新報の1938年5月19日「沖縄で一番欲しいのは、女房と百姓家だ。」/「ひょうひょう乎、藤田画伯きょう帰京」からの引用であるが、藤田は3週間の短期滞在とは思えないほど、沖縄の隅々を見て回り、そして、多くの記事によってその人柄や着眼点が偲ばれる。

藤田画伯一行が去る四月二十七日ヒョッコリ来県してから早くも三週間、そのあいだ「世界のフザタ」にふさわしく、スピーデーなししかも飄々手として、南島の風物に親しみ、講演会に展覧会に印象的な刺激を県民に与えたが、同画伯は愈々きょう出帆の湖北丸で竹谷富士夫氏を同伴、帰京することになった、南島滞在最終日のきうは南風原朝光等と一緒に真玉橋を見物して、夏の夜の珊瑚礁の島で美しい夢を結んだが、沖縄で一番短かったものは「滞在三週間だったことだ」と語りながら左の如く「沖縄一番づくしの一問一答」を試みた

- | | |
|------------------|---|
| (問) 沖縄で一番美しいものは？ | (答) 珊瑚礁に真玉橋、辻の女にデイゴの花、紅染、うるし等 |
| (問) 一番美味ものは？ | (答) アーサのお汁にチャンプルー |
| (問) 面白かったのは | (答) 友人の踊、特に野口、泥軍艦を秀逸とみとむ |
| (問) がっかりしたのは | (答) 泉崎橋の鉄骨だ |
| (問) 恐かったのは | (答) トゲの沢山ある「アバシ」という魚だった |
| (問) おかしかったものは | (答) サーカス団の人と見られた時 |
| (問) 安かったのは | (答) 人力車に泡盛、二つとも十銭出せば酔ってしまうからナ |
| (問) 感心したのは | (答) 沖縄県人の人の親切と活動館の窓明け渡し、玉城盛重氏の踊 |
| (問) さびしかったのは | (答) 花風踊に月夜の墓場 |
| (問) 甘かったのは | (答) もち論あま菓子だ |
| (問) 珍しかったものは | (答) 往来に帯のない女 |
| (問) 大きかったものは | (答) 空、大根、女の「ハカマ」か？（側の竹谷氏に向かってハカマの説明をする） |

- | | |
|------------------|---|
| (問) 小さかったものは | (答) 白蟻の玉子に経便鉄道だ |
| (問) 長かったのは | (答) 女の髪だ |
| (問) 他国に例のないものは | (答) 辻の情趣、薙(ならび)にシステム |
| (問) 外国にないものは | (答) エラブウナギのステッキ |
| (問) 他県にないものは | (答) 琉球新報に女のかんざし、に清明祭 |
| (問) 自慢していいものは | (答) 空手、緋、蟬(カカア)の留守番 |
| (問) 観光団に見せて悪いものは | (答) 「ハブのアルコール漬」(但し生きたものはこの限りにあらず) |
| (問) 新しかったのは? | (答) 学校、とりたての魚、今年のムギワラ帽… |
| (問) 古かったものは | (答) 百里城の古池 |
| (問) 嫌になったものは | (答) ねば土の往来 |
| (問) 勇しいものは | (答) 糸満の女に出征兵士 |
| (問) 嬉しかった事は | (答) 琉球新報社からへり付き火鉢を貰った時、講演会をよく聞いて下さったとき… |
| (問) 不思議に思ったものは | (答) 口飲食店の少ない事 |
| (問) 同うしても分らぬもの | (答) 吃音の沖縄語、榕樹の根 |
| (問) 当たり前だったものは | (答) 活動写真に病院の看板だ、 |
| (問) 辛かった事は? | (答) 御馳走攻めと歓待攻めの多かった事 |
| (問) 欲しかったものは | (答) 沖縄人の女房に百姓家だ |

藤田は帰京後、またパリへ行った後に帰国し、大東亜圏の理想のもとに「戦争協力画」を描いたが、それは歴史画に近い完成度である。しかし戦争協力者と非難を受け、敗戦後、フランスへ移住し、1955年にフランス国籍を取得した後、生涯日本には戻らなかった。

沖縄の空気と湿度、また、女性の表情や身にまとう着物の柄、髪型、簪などに感じ入って、それらを楽し気にカンヴァスに刻む画家の姿が浮かび上がる。異境の画家として生きた藤田の人生が、軍人の息子に生まれなかったら、あるいは、生まれた時代が違っていたら、どのような秀作に出会えただろうか。

本来、沖縄の女性美術について研究を続ける筆者が、女性をモデルとする作品を調べていくうちに藤田嗣治の新聞記事と出会い、それが沖縄の近代における女性の問題、ひいては戦前戦後の日琉関係に関する構造的差別の問題をも顕在化するのである。紙幅の都合上、本文で紹介できない内容は、別の機会を捉えて発表したい。



fig.12 左は小栗氏、右は仲本(南風原)逸子氏

追記・2015年、日本・フランス合作の伝記映画「FOUJITA」(小栗康平監督)が公開され、再評価の機運が高まるなか、当館では、監督である小栗康平氏を招いて「映画「FOUJITA」をめぐって—小栗康平監督トークショー」を2015年に開催した。小栗氏は「藤田にとって、沖縄には特別な思いがあったのだと思う」と舞台上で挨拶し、上映会の後は、南風原朝光の娘で《孫》(1938年)のモデルとなった、仲本(南風原)逸子氏と対面し、ひと時のフジタ談義を楽しんだ。

ここに改めて、生前ご教示いただいた仲本逸子氏への感謝を述べ、あらためて藤田嗣治の作品と向き合うきっかけを与えていただいた、小栗康平氏へ敬意を表したい。